

## 第5章 震災で気付いた地元への思い

青森県・スクランブルエッグ

ヒロさん



実施日：2019年7月8日 聞き手：前川直哉・杉浦郁子

実施場所：北上市さくらホール（北上市）

### 【プロフィール】

1988年、岩手県盛岡市生まれ、(インタビュー時30歳)。2009年、弘前大学で大学公認のセクシャルマイノリティサークル「SALAD HOUSE」を設立。同時期より「スクランブルエッグ」の活動にも関わる。2011年に大学を卒業し東京で就職するが、同年8月より東北に戻り震災復興のNPOなどに勤務。現在は岩手県北上市に在住。インタビュー時は社会福祉法人に勤務。2019年より「スクランブルエッグ」代表に就任。

### 1. NPOでの経験

#### ◆大学卒業後、NPOなどで働く

盛岡で生まれて、大学進学で青森県の弘前市に行きました。就職は一度、東京でしましたが、ちょうど大学卒業の年(2011年)に東日本大震災が起きたんです。就職が決まっていたので東京に行くか、地元に残ってできることをしようか迷ったんですが、一度は東京に就職して。でも復興の状況とかを見て、ずっと気になっていて「やっぱり戻ろう」と考え、震災復興で活動費をもらいながら東北で活動できるNPO法人のプログラムを見つけ、2011年の8月に宮城県の石巻市に入りました。

最初のNPOは震災後にできた団体です。当時はまだ避難所から仮設住宅に移って、みんな入り切るかどうかというぐらいの時期で、コミュニティ支援の仕事をしました。仮設住宅のコミュニティ支援として、「元気ですか」「一緒にご飯食べないですか」と言って、集会所でみんなでご飯をつくって食べる「ランチご飯」というプロジェクトをやって。そこから、「やっぱりそろそろ仕事が必要だよな」という話になって、「いしのみキッチン」という飲食店の立ち上げをやりました。

最初のNPOは1年間の期限が決まったプロジェクトだったので、1年間働いたあとに同じ石巻市の別のNPOに移りました。こちらは逆に、在宅の被災者の方の巡回訪問支援をやっている団体で、ご自宅にいらっしゃる方のお宅を一軒一軒訪問して、「どんなですか」って会いに行ったりしました。あとはソーシャルファームという畑もやっていました。結構、引きこもってしまう人が多かったので、「一緒に畑をやって、野菜づくりを教えてください」

と、おじいちゃんやおばちゃんに教えてもらいながら、まず外に出てもらうきっかけをつくる活動です。そこで精神障害だったり、ちょっと障害のある若者も一緒に畑やろうということで、何人か一緒にやってくれてたりしましたね。ちょっと引きこもりがちだったという若者も一緒にやっていました。このNPOは震災前からあった団体だったと思います。もともと、県と障害者の支援事業などをやっていた団体です。

その後、沖縄から来たボランティアさんから「石巻でやっているような事業を沖縄県でもやりたい」とお話があり、2013年の春からは、石巻のNPOから出向する形で沖縄県の糸満に1年間ぐらいいました。糸満でやっていたのもソーシャルファームの事業です。

沖縄のほうでは、長期の失業率がとても高いんですね。病気だったりとか、障害だったりとか、あるいは刑務所終わって出てきた人とかがやっぱり多かったです。もう一回社会に出るきっかけをなかなかつかみづらいという問題がある。そういう人たちの一歩、リハビリの場というか。まずは毎日畑に出ることで生活リズムをつくって行って、ちょっとずつコミュニケーションをできるようになったら、次は企業でトレーニング、そして実際に企業へ入っていく……というような流れになってほしいという感じでした。

2014年の春にそのNPOは辞めて、盛岡に戻って介護の資格を取る実務者研修を半年くらい受けた後、10月くらいから岩手県大船渡市を拠点とするNPOに移りました。友達がやっていて、「若者で岩手を活性化しよう」という活動をしている団体です。Uターンの促進やインターンシップ、岩手向けのクラウドファンディングのサイトの立ち上げといったプロジェクトをやっていました。そこで1年4カ月くらい勤めたと思います。

ほんとは4カ月だけ手伝って、看護学校に行こうと思っていたんです。でも看護学校に受かってから、入学案内の書類で女子用の制服があることを知って。「ここでまた、スカートをはかねばならぬのか」と思い、1回交渉をしたんですけど、「ルールなので駄目です」と言われて。それで看護学校行くのはやめて、もう1年、大船渡のNPOで働きました。NPOの拠点自体は大船渡なんですが、当時は盛岡の実家に住んでいて、盛岡にもそのNPOの事務所があったので、私はそちらを拠点にしていました。

2016年から岩手県花巻市に移り、今の仕事に就きました。

今の勤め先は障害者の就労支援や高齢者の介護事業をやっている社会福祉法人です。特養があったり、デイサービスがあったり、グループホームがあったりします。最初は就労支援の部署に入って3年弱ぐらやって、去年(2018年)の11月頃から高齢者の認知症のグループホームの部署に移り、今はそこで働いています。

#### ◆家族構成と住まい

今は1人で住んでいますけど、家族構成は母親と兄と妹がいます。母親と兄は盛岡に住んでいて、妹は東京に住んでいます。

この間まで社宅に住んでいたのですが、猫を拾ったんですね。で、社宅は猫が駄目だったんですが、だんだん大きくなってきて、「これはもう隠せない」と思って猫を飼ってOKのアパートを探したんです。でも全然物件がなくて。だから今住んでいる、北上市の一軒家を買いました。今年(2019年)の4月からは、そこに猫と住んでいます。

父とは一緒に暮らしたことは多分ほとんどなくて、ずっと単身赴任でどこかに行っていました。離婚が成立したのは高校3年生ぐらいだったと思います。その後の接点はありません。多分、誰ともないと思いますね。

ちょっと記憶が曖昧なんですけど、父が全然連絡してこない期間がしばらくあって。で、探そうと思ったときに、失踪届を出さないと離婚ができないという話になり、失踪届を出すかと言ってるぐらいのときに連絡がついて、じゃあ離婚届にはんこを押してもらって……という感じでしたね。

## 2. 弘前大学サークル「SALAD HOUSE」

### ◆立ち上げのきっかけは友達

弘前大学の3年生の時、2009年に大学公認のセクシャルマイノリティサークル「SALAD HOUSE (サラダハウス)」を立ち上げました。

もともと大学で女子サッカー部に入っていて、1、2年のときはずっとサッカーしてたんですけど、大学寮に住んでいて、同じ寮に住んでるサッカー部の友達がいる。その子がある日、カミングアウトしてくれて、「あ、こっちもだよ」という関係ができたんです。

自分のセクシュアリティは、「何ですか」と聞かれたら「FtXです」って言ってます。恋愛対象は主に女性です。その友達も FtM か、FtX かで、女の子と付き合っていたことがあって、親に見つかって大変なことになったというような話をしてくれました。

自分にとって人に言うのはそれが初めてで、多分相手もほとんど初めてで。そうなったときに、「1人でも自分のことを分かって、知ってくれてる人がいるというのは、世界が違うようになるぐらいのことなんだ、それだけですごく楽になるんだな」というのが分かったんです。

でも、今まで苦しんでいたというか、結構きつかった自分たちがいるのも確かです。「今も1人で、ずっと1人だけできつい思いをしている人はたくさんいるだろうな」というのがあって、そういう人に、喋れる人が1人でもいるという、そういうことができる場をつくりたいなという話を2人でして、立ち上げに至りました。

### ◆大学の授業で初めて気付く

自分自身、高校までは誰にも言っていないでいました。自分がそうなんだって気付いたのもだいぶ遅くて、大学の授業で気付いたんです。それまでもいろんなことがあったんですけど、教えてくれる人もいなかったのです。勉強したり、部活やったりとかしてたんで、自分で調べることもせず。気付いたのが大学の授業のときだったんです。

たぶん1年生の冬のオムニバスの授業で、半年の授業のうち1コマか2コマぐらいの授業だったと思うんですけど、今田匡彦先生というゲイ・スタディーズをやってる先生がいたんです。「LGBTのこういう人たちがいます」ということで、男の人で男の人を好きな人もいるし、性別が、体の性別と心の性別が違う人もいますって。でも、それは別に変なことじゃないですよ、という話を授業でしてくれる先生がいて。その授業を受けて、「あ、え？」

みたいなの。「これ、マジ？」みたいなの。すごい嬉しくなって、「あー、今までののは！」って。思い当たる節が、むちゃくちゃあったんです。

中学から制服はスカートで、毎日何か嫌で。勉強はしたいけど、制服を着るのが嫌で進学したくなくて。でも、「制服着るの、みんなも面倒くさいんだろうな」「みんなも自分と同じような感じなんだろうな」と思っていたんです。嫌だなあとは思いますが、それが性別に関わるものだという自覚はあまりなかった。「みんな早く脱ぎたい、一瞬でも早く脱ぎたいって気持ちでいるんだろうな」と思っていたんです。それが大学の授業で言葉が与えられて、わあってなりましたね。そこからは本やネットで、いろいろ調べたりしました。

#### ◆スクランブルエッグとの出会い

立ち上げたのは私とその友達で、実質は2人ですが、サークルを立ち上げるのに最低4人必要という決まりがあったんです。で、以前自分に告白してくれた女の子がいたので、「あの子に頼んでみっか」となって。「ちょっと一緒にやってみない？」と誘ったりして。

もう1人は多分、スクランブルエッグのソウさん（本冊子にインタビュー掲載）に紹介されたんだと思うんですよね。自分で見つけた記憶がないので。

ちょうど SALAD HOUSE を立ち上げるタイミングと、スクランブルエッグと出会うのが、大体おんなじ時期だった感じです。サークルを立ち上げようと思ったときに、「でも、集まって何したらいいんだ」と思って。サークルの運営の仕方とか、活動内容とか知りたいなあと思っていろいろ探したら、ちょうどスクランブルエッグのサイトを見つけて、コンタクトを取ってという感じでした。

でもソウさんに連絡を取ったの自体は、もうちょっと前かもしれないです。2年生の冬とか、それぐらいだったかもしれません。

#### ◆SALAD HOUSE の活動内容

SALAD HOUSE は、そもそもの思いがそういうところだったので、まずは「取りあえず直接顔をあわせて、お菓子でも食うべ」みたいな感じで。特に何をやるということはなかったんです。「誰か1人でもしゃべれる人がいる、ほんとの自分みたいなものを出せる人に出会える」ということが目的だったので。だから、そのときにいるメンバーで、やりたいことやろうと。決まっていたのは、毎週この曜日のこの時間にここで集まろうというだけで。みんな「じゃあちょっと映画観てみる？」ってなって、LGBTに関わる映画を観たりもしました。

先ほど話した今田匡彦先生に「こういうサークルをつくりたいんですけど」と言ったら顧問になってくださったので、みんなで先生のところに行って話を聞いたりとか、先生のおうちでみんなで持ち寄りのパーティーしたりとかもしました。今田先生は恩人ですね。今田先生との出会いがなかったら、もう人生変わってましたね。

あとは外に飲みに行ったりとか、みんなでちょっと遊んだりとかしました。ほかは文化祭の話し合いをしたりとかはあったけど、でも普段の活動はそれぐらいだと思います。

SALAD HOUSE のメンバーは、私がいたときは7~8人ぐらい。たくさん集まってそれ

ぐらいだったと思います。大学の中だから「お互い知ってる人もいるかも」とためらう人もいたので、集まる場合もやっぱり結構気を使いました。固定の場所で集まるのはちょっと心配になったりするかなと、毎週集まる講義室を変えたりしながらやっていたね。

サークルの発信は、ホームページをつくったと思います。あと大学公認のサークルという形をとったので、学内にチラシも貼りました。連絡先は、メールアドレスだけぐらいでスタートしたと思います。

割と早い段階で1人連絡が来て、バイセクシュアルの男の子が入ってくれて、それもすごいうれしくて。いろんな話聞けるし。その後も、ぽつぽつと連絡が来る感じですね。別にわあっと来るわけじゃなくて、何か月かに1回、「あ、来た」という感じでした。ああ、同じ大学にこんなにいるんだと、すごいうれしかったです。

SALAD HOUSE という名前を決めたのは、それもソウさんの紹介で、県内の別の大学に通っている子がいたんです。学外の方はメンバーとして入るわけじゃないんですけど、たまに来れるときに来たりとかして一緒に遊んでいて。で、私と友達とその子の3人でいろいろ名前を考えて、その子が案を出しました。人種のサラダボウルの「サラダ」と、家みたいになったらいいよね、いい場所にしたいよね、という思いですね。家で居心地悪い人も多いから、ちょっと矛盾はしてますけど。

#### ◆スクランブルエッグの活動に参加

学生のうちから、スクランブルエッグにも関わっていました。スクランブルエッグの活動も、もともとソウさんとそのパートナーさんが始めていて、私が最初にメンバーとして入ったぐらいの感じだったんです。SALAD HOUSE と、ちょうど一緒に出来だした感じですね。

だからスクランブルエッグの立ち上げの頃から一緒にやってはいました。『にじたま』の記事を書いたり、配ったりとか。2009年の9月に弘前の「カルチュアロード」というお祭りで、通りにテントを出して、メッセージを出して、という「IDAHO メッセージ展」もやったりしていました。

#### ◆地元で顔を出しての活動はためらう

弘前もそんなに大きい街じゃないですけど、顔を出して活動できたのは、岩手じゃないからというのが結構あったと思います。同じことを盛岡でと言われると、やれなかった気がします。

今も岩手県内で、顔を出して活動をずっとできるかということ、ちょっと考えるところはありますね。家族に迷惑が掛かるんじゃないか、という思いが、やっぱりちょっとあつたりします。田舎なんて、そういう噂が伝わるの、すぐじゃないですか。

でも、心配するのはその点ぐらいですね。今の会社の方は、半分うっすら気付いている感がありますし。友達も、もちろん言っていない人のほうが多いけど、まあそれはそれで、という感じで受け入れられるんです。「分かってくれる友達もある程度いるし、いいかなあ」という感じです。

でも家族については、何か迷惑を掛ける可能性あるかなあ、どうかなあみたいな、迷いは

ありますね。

いまスクランブルエッグで活動して、青森の新聞やテレビで報道されるのは別にいいですけど、岩手の新聞やテレビとなると、かなりドキドキしますね。(地方紙やテレビ局が県単位なので) 青森の情報は、あんまり岩手に来ないので。

中学校や高校の同級生に見つかったら、といった心配は別にないですね。中学校ではそんなに仲良かった人もいないし、仲いい人は仲いいけど、別に(自分のセクシュアリティについて)知ってもその関係は変わらないかなというのものもあるし。高校の友達も、知ってる人は知ってるし。知らない人でも、自分が付き合いたい人は、たぶん知っても変わらないかなという感じなので、それ以外の人がどういう反応をするかは、あまり気にならないです。

#### ◆家族へのカミングアウト

母と兄と妹は、セクシュアリティや性別のこと、活動のことも含めて、大体知っていると思います。そんなに興味なさそうだから、あまりしゃべらないですけど。

彼女ができたとき、家族に「彼女いるんだ」という話をしてカミングアウトしたんですが、「へえ」という感じでした。いろんなことに対して、あんまり関心がない感じなので、予想済みではありましたけど。まあでも、伝えておこうとは思いました。自分の話をする上で、それを伝えずに話をするのは結構難しいかなと思って。

兄と母に伝えたのは大学3、4年生ぐらいだったと思います。妹には、1年生の授業で気付いて、わりとすぐの時期に意を決して電話して言ったんです。誰かに言わないと思って。で、電話して「実はこうなんだ」って言ったら、「ああ、そうだよね。それで？」と言われて。妹は先に気づいていたんですね。早く教えてくれればいいのに、と思いました。

家族は知っているけど、でも岩手で顔出しでの活動は、やっぱり抵抗はありますね。おじいちゃんとおばあちゃんも住んでいたりするので、「周りの人から何か変なこと言われたら嫌だな」って。

私の家が盛岡の中でも、まちなかじゃないからかもしれないです。田んぼの中にあるようなものなので。大学のときに実家に帰っていたりすると、全然知らないおばちゃんから、「どこどこ大学でこれこれの勉強してるんでしょう」みたいに話し掛けられる。こちらは「あなた誰？」という状態なのに。恐ろしいと思いましたね。なので、変なことになったら嫌だなと思って。

### 3. 東日本大震災 (2011年)

#### ◆震災の年の4月に東京で就職

大学卒業後、奨学金を3年間で返そうと思って、なるべく稼げる仕事を探して、東京の大手のパチンコ屋の正社員になったんです。社宅として安いアパートがあって。そんなに稼げるわけでもないですけど、新卒で手取り26万円ぐらいで。最初はみんなそれぞれの店舗(ホール)に配属される期間があったので、私も三軒茶屋の店舗に入っていました。

キュロットみたいなスカートの制服だったんですけど、就活の時、制服のこととかあまり

考えてなかったんですね。いつもあまり考えてなくて、後から「おっと」って思うんですよ。でも自分の中でも、3年間我慢すればいいんだな、まあ稼ぐ方がいいと思って。

震災の年（2011年）だったので、新入社員の新人研修も、私の年だけなくなりました。東京には行ったけど震災のことは気になっていて、東京にいてもできるボランティアを探しました。お寺で寄席を開いて、そこで寄付を集めて東北に送る活動をしている団体とか。仕事がシフト制なので、参加できる条件にあうボランティアが少なかったんです。週末のボランティアバスとかには乗れないから、その日にできることを探してやっているような感じでした。東京の代々木公園とかでやるイベントのボランティアスタッフをして、そこで稼がれた金を東北に送るみたいなとか。

だから、何か遠いなあ、という感じもあったし、東北のニュースとか見ると、まだまだ（復興が）あまり進んでいないのに、感覚としては周りの人の東北への関心が薄れていくのもすごく感じるんですね。だから「このままでいいのだろうか。地元の間が今、こんなんでいいのだろうか」というのは、ずっと考えながらやっていました。

#### ◆東北人としてのアイデンティティ

震災が起きたときは、盛岡にいました。わりと揺れは大きかったです。

私は卒業式を待ってて、ゆっくりして過ごしていたんですね。何日か後に、サッカー部のみんなと卒業旅行に行く計画を立てていて、ディズニーランドにみんなで初めて泊まりに行くぞという予定があったので、それを楽しみにしながら最後の暇な時間を満喫していたんですよ。兄とだったらテレビを見ながら過ごしていたときに揺れました。

停電もありましたね。わりと早く復帰した気もするけど、その日の晩とかはもう真っ暗だったし、母親も職場にいたので、「どうする、どうする」と言ったりして。家族や親戚は、みんな内陸なので大丈夫でした。

沿岸部の津波のことは気になりました。岩手はもちろん同じ県だから、自分の出身というアイデンティティがあるし。あと、大学のときに原付で弘前から仙台まで回ったことがあって、そのときに結構いろんな所で助けられながら回ってたんです。沿岸のところで、自賠責が切れてることに気付いて。ちょうど宮城の沿岸のガソリンスタンドで、「あれ、切れてるよ」「この辺、白バイ走ってるから危ないよ」と言われて「マジですか」ってなって。「お金ないっす」って言ったら、その人が「入った方がいいよ」って近くのJAまで車で連れていってくれて、お金も貸してくれて。お金をお借りして、後でお手紙を添えて郵送でお返しして、というようなことがあったんです。そういうこともあって、何か東北の人に対する思いのようなものがありました。

大学では東北の各地からみんな集まって、友達も福島の子もいるし、宮城の子もいるし、秋田の子もいるしという感じで。東北人としてのアイデンティティが、わりとあったりもするし、お世話になってここまで育ってきたという思いもあったんです。

なので、自分がこんなときに東京にいるのはという、もやもやした感じがありました。

#### ◆大学での活動経験と震災後のNPOでの仕事

それで仕事を辞めて、2011年の8月に、先ほどお話した宮城県石巻市のNPOに入ることになりました。石巻に特別な思いがあったわけではなく、NPOに派遣するサイトを見ている中で、「こういうのをやってみたいな」というので行きました。

当時、特にコミュニティ支援の経験があったわけではないです。震災から時間が経ってからは、具体的に「こういうスキルを持った人が欲しい」「こういう経験のある人が欲しい」という求人になっていったんですけど、2011年のころは「誰でもいいから来れるやつ」みたいな勢いがあったので。

大学時代のSALAD HOUSEやスクランブルエッグの活動の経験は、生きてはいると思います。そもそも、すごい人見知りなんです。今も人見知りではあるんですけど。「初めて会った人とどうしゃべるか」みたいなことも、多分大学時代に活動しながら身に付いていったのかなと思いますね。マイノリティの居場所作りとかも、その場で初めて会った人と、どこまで聞いていいのか考えながらなので。そういう距離の取り方とかは、勉強させてもらった気がします。

#### ◆それぞれの場所での活動

大学を卒業して東京に行くときに、セクマイの団体や活動から離れることについての不安は特にはなかったです。東京に行けば、それはそれで新しい何かがあるんだろうと思って、楽しみにしていました。例えば新宿2丁目に行ったりしたことないから、何かやってみたいなあと思ったりしながら。

大学時代にもインカレのサークルで知り合いもいたりしたので、東京のほうで会ったりとかしていました。SALAD HOUSEを立ち上げるとなって、スクランブルエッグにもコンタクトしていたとき、「学生団体でやってるところも、もうちょっと見たいな」と思って、それでコンタクトを取って、交流ができてということがありましたね。

ただ実際に就職して東京に来たときは、震災があったので、東京のセクマイの団体とはほとんど関わらずでしたね。

石巻のときはちょうどアプリがはじめて、石巻の人がいて一緒に遊んだりということがありました。

沖縄に行ったときは、ピンクドット沖縄というアクションをやってる方がいて、そのボランティアスタッフで関わらせてもらったりはしていました。コアメンバーになったわけではないですけど、スタッフとして一緒にやらしてもらったりしていました。

なので、それぞれの行った先で、何か興味を持ったものには行ってみようかなという感じで来ていますね。

#### ◆話題に上らなかったセクマイの話

石巻にいたときは、例えば避難所や仮設住宅でのセクマイならではの困難といった話は、特に聞かなかったと思います。わりと高齢者の方と関わる機会のほうが多かったので、あんまりそういう話を聞かなかったですね。当事者に会わなかったというか、当事者だと開示を

するような関係になる人がいなかったというか。若者がそもそもいなかったというのもありますけど。

若者にはあまり会わなかったですね。いたとは思いますが、多分みんな自分の生活のことですごく忙しい時期だったと思うので、「イベントをやりますよ」と言っても若者の姿をなかなか見かけなかったです。

結構な数のお宅を回ったりしていますけど、セクマイに関する話は上がってこなかったですね。ほんとにみんな、まずは自分の暮らす家をどうするかとか、仕事をどうするかとか、そういう話をしていました。

## 4. スクランブルエッグの代表として

### ◆スクランブルエッグの代表に就任（2019年）

沖縄から盛岡に戻ってきたぐらいのタイミングから、スクランブルエッグの活動への関わりはまた増えました。近くなって行きやすくなったので、頻度は少し増えたと思います。

何年か前から、ソウさんから「代替わりしたいなあ」「ヒロさん、やんないかなあ」という話は言われていたんです。でも、そんなに活動に頻繁に参加できるわけではないし、住んでいるのも岩手だしということもあって。だからどうかなあとは思ってたんですけど。

ちょうどソウさんが代表を辞めたいということがあり、一時期、代表が不在になったんです。活動していくけど、「ずっと代表が不在のままなのもあれだよな」というのもあって。

あと、スクランブルエッグ自体、人の居場所としてとてもよく機能していたんですね。そもそもは外に向けての啓発活動とか、何か自分たちにできることをやろうという目的で立ってはいらないうんですけど。それでも、「スクランブルエッグをどんなふうに思っていますか」というアンケートを取ると、居場所だと思ってるという回答が結構多くて。

やっぱり、そういう場所はあり続けてほしいなあという思いがあったので、そのためにはまあ、自分ができることは何でもやろうという気持ちでいたので。「岩手に住んでいるから、実際に活動に参加できなかつたりしてもいいんだったら、全然やりますよ」ということで、今年（2019年）に入ってから代表に就任しました。

代表になって気持ちの変化は、あんまりないと言えないです。あんまりないと言うと良くないかもしれないですけど。スクランブルエッグが、無理せず楽しくできることを、というモットーでやっているんで、代表の私もそれを体現していこうと思っています。無理はしないで、でも、できることをしようという気持ちがちょっと強まるぐらいの変化ですかね。

### ◆岩手でも活動したいという思い

岩手で何かやりたいなという気持ちはあります。家を買っちゃったのもあるし、一人暮らしなのでスペースが空いているから、そこをシェアハウスとか、ちょっと民泊みたいにして、人を呼べる拠点にしてみたら面白いかなとか、思ったりはしています。

スクランブルエッグは、今のところは青森での活動が多いですかね。でも、秋田の団体さんとか、宮城の団体さんとなつながりがあるので。「秋田の大館でメッセージ展やります」と

か、緩くつながりはある感じです。

岩手で何かやる場合も、スクランブルエッグのままでやろうかなと思っています。岩手支部ということで。

たださっきお話したような、地元ならではの難しさもあるので、どうしようかなと迷っているところはあるんだと思います。あまり自分で意識していなかったけど。やろう、やろうと思いつつ、何でもまだやっていないのかなと思うと、きっとそこに躊躇があるのかなという気が、今話していて感じました。

スクランブルエッグの名刺の裏をどうするかという話をしたときに、もともと「青森県の市民サークル」という表現だったんですが、「青森県で発足した」というバージョンもつくったんですね。こうすれば青森以外で活動してもいいんじゃないかとか、そういう話もしたりして。ソウさん自身も、他の県でやるのは割と賛成派ではあるので、「岩手で何かやりなよ、やりなよ」って言っているの。そこはこれから、そのときのメンバーによって、また変わっていくのかなと思います。

#### ◆活動で気を付けていること

スクランブルエッグの活動で気を付けているのは、やっぱりクローゼットの当事者さんがとても多いので、そこをちゃんと守れるようにできればいいというのが第一ですね。ソウさんが一番気を使っているのは、変な人というか、危ない人に対する嗅覚をすごく高めている気がします。アウティングをされちゃって、いじめに遭ったことがあるといった経験がある人がやっぱりいるので、そういうことをしそうな人に対する嗅覚みたいなのは、いつもすごく尖らせているなあという感じはします。

今いるサークルのメンバーが、嫌な思いをすることがあるかもしれないと思ったら、それはちょっと遠ざけるといった気の配り方をすごくしているなあと思います。私、そういう気の配り方とか、苦手なんですけどね。割とどんな人でも、うんうんってやっちゃうタイプなので。だから大丈夫かなあとは思ってるんですけど。

でも、ソウさんみたいな人もいるし、そういうやり方もあるから、どういうふうメンバーを守っていったらいいかみたいなことは、結構考えたりします。

政治色が強すぎる人も、気を配る対象に入りますね。やっぱり過激なもの、スクランブルエッグのスタンスとしては全然違って。あんまり主張が強過ぎて敵をつくるようだと、それは趣旨から逸れてしまうというか。「身近にも普通に、こういう人が生きてるんだよ」ということを伝えただけなのに、あんまり攻撃性を出してしまうと良くない。良くないというか、何か「異質な人」として見られ続けることになってしまうんじゃないかなというのもあって。だからそこは多分、ちょっと距離を置いているんだと思います。

私としては、関わりがあること自体は別にいいと思うんです。もし何か一緒にできることがあって、それもやりたい人がいるんだしたら、いいと思う。そういう感じではあるんですけど、でもあまり一緒にやっているとかわれたいわけではないかな、というのはありますね。そうなのと、本来したいことが、ちょっとうまく伝わらなくなっちゃったりするかなというのはあります。スクランブルエッグは、別に誰かを攻撃したいわけでもないし、分かってほ

しいって大きい声で言いたいわけでもない、というところです。

青森という地域に関係なく、やり方として、穏やかなほうが受け入れられやすいんじゃないかという、個人的な思いはあります。地域はあまり関係なく、どこでもそうだと思うんですが、田舎のほうが、より強いと思います。何か異質なものに対する攻撃性とか、拒否性みたいなのは、地方のほうが強い感じがするので。

どこでもそうだと思うんですけど、やっぱり、ちょっと変だなあとか、ちょっと障害がある人とか、絶対いじめられるじゃないですか。そういうところですよ。あとは振る舞いが、男なのにちょっと女っぽいか、そういう人は絶対攻撃の対象になっている気がします。

#### ◆東北の地域性

早く結婚しろというのは、東北は強い気がしますね。職場でもそういう話になるけど、特に親戚とか、親類の集まりみたいなので、そういう圧力が強い気はします。東京だと結婚せず仕事している人も、もうちょっと尊重されたりしますけど。

東京だと親類の集まり自体少ないと思うんですが、こっちだとやっぱり何かと集まりますね。で、よく知らない人から、色々と言われたり。

そういう場で、セクマイとかカミングアウトとかの話をするのは難しいです。もう、その人たちの頭に1ミリもないことをぶっ込んでいくわけですから。こっちが人生の大事な部分の何パーセントも占めているとしても、頭の中に1ミリもない人たちばかりのところではそれをぶっ込む気にはならないですよ、なかなか。

なのでまず、『にじたま』を配ったりという活動を通じて、知ってもらうところから始めないといけない。まだ肌感覚としては、そういう人がいると知らない人のほうが多いぐらいの感じ。テレビでは見たことあるけど、という感じ。

#### ◆広さと気候

東北の広さも、関係していると思います。まず、結構集まりづらい。

この前盛岡で、ESTOさんが主催のイベントに行ったときに、「初めてこういうセクマイ関係の集まりに来ました。県南にはLGBTの人いるんですかね」みたいな話をしている人がいたんですね。岩手だと、県南と、県央（盛岡中心の地域）と、県北（二戸とか洋野町とかの辺り）と、沿岸各地域、みたいな感じで、何となく集まりやすい所が分かっているような気がします。分かれてしまうと、それぞれの人が少なくなる。盛岡は中心で集まりは結構あるけれども、県南だとなかなか集まりがない、多分県北にもなかなかない、といった事情があると思います。

だから盛岡以外の人は盛岡に、結構な距離を移動してくる。その結構な距離を移動できる余裕が、金銭的にも時間的にもある人じゃないと、そういう集まりには行けないというのはあると思います。

雪が降るのは、あまり関係ないんじゃないですかね。冬に外の集まりはしないぐらいかな。雪が積もっても移動はしますけど、しづらくはなりますね。山道は閉鎖するところもあるので、行きづらいところもあると思います。

## 5. 評価と課題

### ◆活動への評価

スクランブルエッグの活動によって、社会的なインパクトがどれくらい生まれたかというのには全然分かりませんが、少しは意味があると思うし、あったと思います。『にじたま』を手にする人や、メッセージ展とかで目にする人もいるだろうし、そこで初めてセクマイに関する情報を目にする人もいたと思うので、それは意味があったことかなと思っています。今はLGBTについてどんどんテレビとかでも取り上げられたりしていますけど、「身近にこういう人が普通にいる」ということを知ってもらうことはできていると思います。

身近にいるということを知ってもらう。知ってもらうというか、今は、テレビの中で知っているという人がまあ増えてきた状態だと思うので、それが「自分の身に起こっていることなんだな」と思う人が増えていくところが、活動の意義かなと思っていますね。

私自身にとってスクランブルエッグは、やっぱり一つの居場所になってるなというのはあります。安心して過ごせる場所。社会の中で過ごしているところで持ち続けなければいけない緊張感というのはやっぱりずっとあって、それから解放される場所としては、すごく大事だなと思っています。

あとは、何かできること、自分にできることをしたいというのはいろんなところでもあるので、それをちょっと出せる場所でもあります。何かできることを思いついたらやれるという場所でもあるので、それはすごく大事ですね。

私としては、『にじたま』のような啓発活動はもちろん続けながら、居場所のほうもしっかりやっていきたいみたいという思いはあります。啓発活動というのが、だんだんネットでも自由に情報が取れるようにはなってきているし、テレビで映ったりする機会も増えてきているし、だんだんそういう流れになっているとは思っているので。居場所、直接会える場所をつくりたいなあとと思っています。

### ◆活動の課題、これから取り組みたいこと

活動の課題はいろいろあると思います。さっき言ったように、どういうふうにかローゼットのメンバーを守っていくかということも課題だし。どんどんLGBTに関する情報が増えていたり、SNSが変わったり、時代が変わっていく中で、活動をどういうふうに変化させていくか。メンバーの気持ちもあるので、そこを踏まえつつ、どういうふうにならっていくかというのは、常に課題になるだろうなとは思っています。

あとは地域性ですね。地域性と、自分の地元との活動の関係は、とても大きいなあと感じますね。自分が大学生の時に弘前で活動していたみたいに、地元じゃないところだと、みんなそんなに抵抗なく活動できるかもしれないけど、やっぱり社会人になって生活の拠点の近くで活動していくという人が増えてきたときに、私みたいに「活動したいけど、じゃあここでどうやって活動していくか」みたいなのは、結構課題だなあと感じます。私自身にとってもそうだし、そうやって暮らしと活動のやり方を、どうしていくかというのは課題だと思います。

自分が暮らしている街で活動することには迷いがあるけど、自分の暮らしている街だから良くしたいと思う。だから、なかなか難しいですね。

いま住んでいる北上市は多様性に関する条例を最近つくったり、岩手の中ではわりと進んでいるんじゃないかという気風はあたりもするので、やらないのはもったいないなあという思いもあるけれども、その一方で、という迷いですね。条例ができたというニュースも見て、「ああ、北上もいいぞ」というような思いはやっぱりあったので。

行政の持っている予算を活用してく選択肢もありますよね。ソウさんは、助成金を取って何かやろうとか、あまりしないくらいはあるんですけど。面倒くさくなるのもあるし、サークルのメンバーが、「そういうのはちょっと」という人が青森ではたぶん多かったです。でも私はずっと NPO でやってきて、助成金いいぞ、と思っているので、チャンスがあればとは思っています。

やっぱり、岩手を良くしたい、地元を良くしたいという思いはすごくあるんです。若者に岩手に戻ってきてもらって盛り上げていこうという仕事もやっていましたし。

実際自分も、県外のいろんな所に出て、やっぱり戻ってきたという人間でもあるので。お世話になったこともあるし、好きだから良くしたいという思いはすごくあります。この土地でできることがあったら、すごくいいなあという思いはありつつ、正直どうしようかなあという部分もあって。

あとはもうちょっと、他の地域ともつながって岩手を良くしたい、という強い思いはありますね。他の地域と一緒に何かやりたいというか、東北6県、似たような課題ももちろんたくさんあるだろうし。いろんなところの人が一緒にやることで、また良いこともあると思うんですよね。

#### ◆震災で「地域」を考えるようになった

震災で人生が変わったなあという感じはあります。震災があるまでは、地元のことを考えたことって実はあまりなかったんですよ。特に岩手が好きとか、将来は地元に戻りたいみたいな思いがあったわけでは全然なくて。逆にそんなに愛着がないほうというか、他の人はすごく地元のことを好きだったり、やっぱり戻って仕事したいとか言ってたけど、「へえっ」という感じで。どちらかという、離れたいという思いがあったんです。

震災があって、なるほど、ふるさとというのはなくなるもんなんだなあと思って。そのときに、なくなってもいいかと言われたら、やっぱりそうじゃないぞと思ったんです。やっぱり地元って特別な思いがあるんだと気が付いたきっかけでもあるので、震災は大きかったですね。

だんだん変わっていきました。もとは、どこでやってもやりたいことやれば一緒だと思っていたけど、やっぱりそうじゃない。住む場所によって自分の暮らしが変わる、人生が変わるよなと思うようになって。どこで暮らすか、どこで住むかというのは、すごく大きいことだなあと思い始めた。だんだんそう思っていたという感じです。やっぱり、震災が大きかったですね。

大学のときは、「今いる自分の場所の居心地を良くしたい」というぐらいの思いだったん

です。青森をどうしようという思いは、自分自身としては別になかった。弘大で何とかというよりは、今自分がいるところの居心地をまず良くしたいというような思いでやっていたので。そこに地域というのが加わってきたのは、震災があったからですね。